

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム（2007.12）8巻1号:14～15.

エッセイ 母乳で眼を洗う話

奥野晃正

エッセイ

母乳で眼を洗う話

奥 野 晃 正

・眼へ乳をもらった人と不義ができ（川傍柳三編）

古川柳を読んでいたときに見つけた句である。これが古い記憶を呼び起こしてくれた。大学に入って間もない頃、大学構内を歩いていたときに、ストーブの煤のようなものが眼に入った。かなり大きなものだったらしく、激しい痛みとともに涙が流れた。耐え切れずに大学の食堂に飛び込んで目を洗っていると、食堂の小母さんが声をかけてくれた。涙を流して、何度も顔のあたりを洗っている姿を見て何事かと思ったのである。「泣いているのではない、眼に煤のようなものが入ったので、眼を洗っている」と話したところ、「お乳で洗うとすぐ取れるのだけれど、私はもう出ないから」といって、しゃもじで牛乳をすくって眼に流し込んでくれた。残念ながら効果はなく、眼科に駆け込んで処置してもらった。このときは、なぜ乳汁で洗うのか訳が判らぬままに過ごした。

十数年前に、雑誌で古い絵馬についての記事を読んだことがある。その中に女性の乳房から乳汁がほとばしり出ている絵馬の写真が掲載されていた。母乳が出ること願って奉納されたものであるとの解説があった。当時の絵馬としては特殊なものだったらしい。

授乳中の女性の乳房を搾れば、勢いよく乳汁が出る。眼に入った埃を洗い流すこともできるだろう。体温の暖かさで、刺激性もないから合理的である。眼に入った埃を母乳で洗い流してもらう姿を想像すると、微笑ましくも思えるが、なんとなく気になる姿でもある。母乳で眼を洗ったあとに、どのようなことが起こるのか気になるだろう。いつの時代でも若者が親切な女性に母乳で洗眼してもらえば、思わず・・・ということがあるかも知れない。きっとあったに違いない。不義はお家の御法度だから、大変なことになる。それが冒頭の句である。今になって思えば、あの時の食堂の小母さんは母乳が出なくなった人で幸いだった。

古川柳にはこれ以外にも母乳で眼を洗う句がある。

・目へ乳をさす引越の中（武玉川初編）

・夜討ちの跡で目へ乳をさす（武玉川四編）

引越や夜討ちとなれば、どたばたで埃が立ち、埃が眼に入り、母乳で眼を洗うことになる。大騒ぎの最中に不釣り合いな姿が笑いを呼ぶ。

・松ヶ岡目へさす乳の哀れなり（武玉川九編）

鎌倉の松ヶ岡東慶寺は縁切り寺とか駆け込み寺として有名である。婚家の生活に耐えきれず、生まれて間もないわが子をおいて東慶寺に駆け込んだ母親は、母乳を与えることはできない。気の毒にも洗眼にしか使えないのである。

・二百十日目へ乳をさす日也けり（武玉川十三編）

台風の日には砂埃が目に入ることも多いだろう。あちらでもこちらでも母乳で洗い流していたと云うのである。

母乳で洗眼する手技は遅くとも江戸時代には存在し、私の学生時代（昭和30年代）までは伝承されていたことになる。最近は少子化で、母乳だけで育てることが少なくなったためか、母乳で眼を洗う話を聞くことはない。既に忘れられ消滅した文化なのだろうか。上記の句がつくられた18世紀中頃には、目へ乳をさす姿を見る機会があったのだろう。それが約200年にわたり細々ながらも続いていたことになる。

江戸時代には眼病の患者が多かったという。眼薬や目医者を経験した川柳が多数あることから頷ける。また、外科、産科のほかに眼科を専門にする医者がいたことは、さまざまな資料からも確認できる。

幕末に日本にきたポンペも、「日本には盲人が多い、その理由は主として眼病の治療法を知らないことにある」と記している。「大風が吹くと桶屋が儲かる」という話は盲人が多かったことを、また色っぽい姿に見える譬えの「目病みおんなに風邪ひきおとこ」は眼病

が多かった時代を象徴している。

眼病が多かったのは、なにも江戸時代に限ったことではなく、数十年前まで続いていたと考えられる。昭和16年に小学校（当時は国民学校）に入学した私の子供時代には、毎年の身体検査で行われる眼科検診で、クラスから数人は眼科受診を勧められていた。身体検査の後、しばらくは学校の近くにある眼科医院は小学生であふれていたのを憶えている。ほとんどが感染症で、とくにトラコーマ（当時はトラホームと呼んでいた）が多かった。トラコーマがあまり問題にされなくなったのは、昭和30年代後半になってからである。

母乳で洗眼することについて、川柳や地口のような根拠の薄いものではなく、しっかりした文献がないものかと探しているが、今のところ見あたらない。あるとすれば、民間伝承の記録のようなものではなかろうか。

母乳で眼を洗う目的は、眼に入った埃などを洗い流すことにあると理解していたが、母乳には感染防御作用のある諸因子が含まれているから、治療に利用したとも考えられる。二年ほど前にテレビ番組でルーブル美術館に収蔵されている古代エジプト出土品の展示があった。その中にヒト型をした薬瓶があり、これに母乳を入れ目薬として使ったのだと解説していた。母乳に何らかの薬剤を加えたらしいが、そのあたりは定かでない。古代エジプトでも、洗眼ないし目薬として母乳を利用する手技があったことになる。そうならば世界共通の手技である可能性も考えられるが、果たしてどうだろうか。ご存じの方がおいでなら、教えていただきたい（川傍柳、武玉川の句は岩波文庫からの引用）。

（旭川医科大学名誉教授・前業務監事）